The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「旅」考
Author(s)	竹内, 史郎
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 24-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「旅」考

竹内史郎

一　はじめに

本稿は、「旅」という語を取り上げ、その意味や品詞性について考察するものである。[1] 以下では、古代語の「旅」と現代語の「旅」の特徴的なところを明らかにしながら、古代語の「旅」は、現代語の「旅」と異なり、動詞的な意味合いを含まないことを示そうと思う。次節で先行する研究を概観したのち、第三節で場所名詞と考えられるものを指摘し、第四節で、「家」との対比から「旅」の輪郭を明らかにしていく。第五節では、現代語に認められる動詞的な意味合いを含む「旅」を考察し、そして第六節をまとめとする。

二　従来の研究

柳田国男の一連の研究（一九八一、一九八二a、一九八二b）には、次に示すような「旅」の語源に関する記述がある。

（1）a　日向の山村では、他人を訪問するときに携えてゆく手みやげをトンビと言う。

b　各地の民俗語を調査すると、トンビに類似するものに、トビトビ・トヘトヘ・タビタビなどがある。

c　トンビ・トビトビ・トヘトヘ・タビタビ等は、手みやげを差し上げることによって家主の歓待を求める行為である。

d　手みやげを持って訪ねて来る外客が、トビトビ・トロベー又はタビタビと言ったことは、旅行を意味するタビという言葉との間に何らかの関係がある。

e　「たまはる」から転成した「たぶ」という語の命令形「たび」を用いて、何かを与える代償を「下さい」と言うのが、タビであり、旅であった。その訛形がトンビの類である。

要するに、「たまふ」「たまはる」から「たぶ」が転成して、交易

を求める呼びかけである命令形「たべ」から、交易のために往来に出かける行為「たび」が生まれたとし、「旅」と「たまはる、たぶ」の同根関係を説いている。

また、工藤（一九八二）では、右の柳田説を受け継いで、[2]「旅」は敬語動詞「たぶ」の連用形「たび」に由来するとして、萬葉集には「たぶ」の連用形として動詞の域にとどまっているものが存し、これが連用形名詞となり得るのは萬葉第四期になってからだということが述べられている。すなわち（2a）の「旅行く」はいわば「賜び行く」とでも表され、（2b）の「騒ぎ行く」と同様に「動詞＋動詞」型の複合動詞を形成しており、前項と後項が同時進行の関係にあると見ている。

（2）a 漁すと人とを見ませ草枕旅行く（客去）人にわが名は告らじ　（萬葉集・巻九・一七二七）

b 山のはにあぢ群騒ぎ行く（驂去）なれど我はさぶしゑ君にしあらねば　（萬葉集・巻四・四八六）

これに対し、阪下（一九八二）では、萬葉集に見える「旅」について、「草枕」という枕詞が旅中の経験を示して「実辞として機能する」例の多いことや、遠路の「旅」のみならず近在への「旅」と言えるものが見出せること等から、「旅」の原義は、単にすみかを離れることなのではなく、すみかを離れて他に寝泊りすることと述べている。そして遠路の「旅」と近在の「旅」との関係は、後者が源で前者はその展開形態であるとしている。

遠近に関わらないとする阪下氏の指摘は、古代語の「旅」の特徴を捉えたものとして注意される。本稿では、主に「旅」とシンタグマティックな関係にある表現に着目し、氏とは異なる側面から意味的な特徴を明らかにしたい。また、柳田（一九八一、一九八二a、一九八二b）や工藤（一九八二）で述べられた、上代語の「旅」に動詞的な意味合いが認められるとする説についても、「旅」の品詞性に関して参照し得るデータに基づき、その当否を確かめてみる余地があるように思われる。

以下では、右のことを端緒とし、あらためて「旅」の意味と品詞性について考察したところを述べる。

三　「旅行く」の解釈

萬葉集には、「旅行く」という形が二〇例存する。

（3）a 草枕旅行く（羈行）君を荒津まで送りそ来ぬる飽き足らねこそ　（萬葉集・巻十二・三一一六）

b しろたへの藤江の浦にいざりする海人や見らむ旅行く（多妣由久）我を　（萬葉集・巻十五・三六〇七）

c あをによし奈良の都に行く人もがも草枕旅行く（多妣由久）舟の泊まり告げむに　（萬葉集・巻十五・三六一二）

この解釈については、先に述べたように、前項と後項が同時進行の関係にある複合動詞を形成しているという説がある。ところが、敬語動詞「たぶ」の振る舞いを調べてみると、次のように複合動詞の後項となる例は多く見受けられるが、前項となる例を見出せず、「旅行く」の「旅」を動詞「たぶ」の連用形と考えるのはむ

ずかしい。

（4）a 我が聞きし耳によく似る葦のうれの足ひく我が背つとめたぶ（勤多扶）べし　（萬葉集・巻二・一二八）

b 聖天皇朝太政大臣正之弖仕奉止勅祁礼止数々辞備申多夫仁依弖　（続日本紀宣命・二十六詔）

c 其理仁慈哀天過无久毛奉仕之米天志可等念保之米之天可多良比能利多布言乎聞久仁　（続日本紀宣命・三十六詔）

むしろ、敬語動詞「たぶ」は、補助動詞としての用法を発達させていることがうかがえるのである。

そこで、試みに「旅行く」の「旅」を名詞とみなし、「旅」を「行く」に伴う無助詞名詞句と仮定してみる。その上で、「行く」に伴う無助詞名詞句を網羅的に調べた場合、その名詞句がどのような種類のもので尽くされるかを調査してみよう。その際、（5 a b）のような無助詞名詞句と「行く」との間に句切れがある例や、（5 c）に示すように、無助詞名詞句と「行く」との間に他の句が介在している例等は考察の対象から除いておく。

（5）a あさもよし紀人ともしも真土山（亦打山）行き来（行来）と見らむ紀人ともしも　（萬葉集・巻一・五五）

b 飛鳥川（明日香河）行き回る（逝廻）岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ　（萬葉集・巻八・一五五七）

c しなが鳥猪名山（居名山）とよに行く（響尓行）水の名のみ寄そりし隠り妻はも　（萬葉集・巻十一・二七〇八）

よって考察の対象となる例は、次のように、無助詞名詞句と「行く」が隣接しているものに限る。

（6）我が衣摺れるにはあらず高松の野辺（高松之野邊）行きしかば（行之者）萩の摺れるぞ　（萬葉集・巻十・二一〇一）

さて調査の結果、「行く」に伴う無助詞名詞句は（7）～（9）に示すもので尽くされる。

（7）場所を示すもの

a 可敞流回の道（美知）行かむ（由可牟）日は五幡の坂に袖振れ我をし思はば　（萬葉集・巻十八・四〇五五）

b あかねさす紫野（武良前野）行き（逝）標野（標野）行き（行）野守りは見ずや君が袖振る　（萬葉集・巻一・二〇）

c 和射美の峰（嶺）行き過ぎて（往過而）降る雪の厭ひもなしと申せその児に　（萬葉集・巻十・二三四八）

（8）主語を示すもの

a 梅の花咲き散る園に我（吾）行かむ（将レ去）君が使ひを片待ちがてり　（萬葉集・巻十・一九〇〇）

b 飛鳥川水（水）行き増さり（往増）いや日異に恋の増さらばありかつましじ　（萬葉集・巻十一・二七〇二）

c あらたまの年（年）行き反り（往更）春されば花のみにほふ　（萬葉集・巻十九・四一五六）

（9）時・数を示すもの

a 二人（二人）行けど（行杼）行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ　（萬葉集・巻二・一〇六）

b あしひきの山縵の児今日（今日）行くと（往跡）我に告げせば帰り来ましを　（萬葉集・巻十六・三七八九）

c 今年（今年）行く（去）新島守が麻衣肩のまよひは誰か取り見む　（萬葉集・巻七・一二六五）

なお、それぞれの用例数を示せば、次のようになる。

場所を示すもの	主語を示すもの	時・数を示すもの
54	8	17

「行く」に伴う無助詞名詞句がこのようなあり方を示すとすれば、「旅行く」の形も（7）から（9）のいずれかにおさまることが望ましい。しかし「旅」が主語や時・数を示すと考えられないことから、（7）に示す類例に従って、（7 a）「道行く」、（7 b）「標野行く」、（7 c）「峰行く」がそれぞれ「道を行く」「標野を行く」「峰を行く」と解せるのと同様に、「旅行く」については「旅を行く」と解すべきである。つまり、「旅」を場所名詞として解釈するのがよいと考えられる。

場所名詞としての「旅」は「旅行く」の形に限られるのではなく、次のように容易に見出すことができる。

(10) a 家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥せる（客尓臥有）この旅人あはれ　（萬葉集・巻三・四一五）

b 草枕旅にし居れば（羈西居者）刈り薦の乱れて妹に恋ひぬ日はなし　（萬葉集・巻十二・三一七六）

c 梅の花散らす春雨いたく降る旅にや（客尓也）君がいほりせるらむ（廬入西留良武）（萬葉集・巻十・一九一八）

とすると、「旅」は次に示す「道」と類似した振る舞いを見せているということができる。

(11) a 玉ほこの道行き暮らし（道行晩）あをによし奈良の京の佐保川に　（萬葉集・巻一・七九）

b 国にあらば父取り見まし家にあらば母取り見まし世間はかくのみならし犬じもの道に伏してや（道尓布斯弖夜）命過ぎなむ　（萬葉集・巻五・八八六）

四　「家」との対比から

伊藤（一九七六）において「古代の行路をなげく歌には鉄則的ともいうべき発想ないし型式がある」と指摘されるように、萬葉歌には「旅」が「家」との対比によって語られる側面がある。ここでは「旅」を「家」との対比から捉えることによって、「旅」に含まれる生活空間性や非日常性について考える。[3] まずは、「家」の意味について詳しく見ていく。

（12 a b）からわかるように、「家」と「屋戸」はともに玉を敷く場所であり、言い換えが可能であることがわかる。

(12) a 玉敷ける（玉敷有）家（家）も何せむ八重むぐら覆へる小屋を妹と居りてば　（萬葉集・巻十一・二八二五）

b あらかじめ君来まさむと知らませば門にも屋戸（屋戸）にも玉敷かましを（珠敷益乎）

（萬葉集・巻六・一〇一三）

（13ａｂ）からは、「家」と「屋」が共に家屋を示しており、同じく言い換えが可能であることがわかる。

（13）ａ つれもなき佐保山辺に泣く子なす慕ひ来ましてしきたへの家をも造り（宅乎毛造）あらたまの年の緒長く住まひつつ

（萬葉集・巻三・四六〇）

ｂ 夕づく日さすや川辺に作る屋の（構屋之）形を宜しみうべ寄そりけり

（萬葉集・巻十六・三八一〇）

さらには（14ａｂ）でも、「家」と「屋外」が共に庭を示しており、ここでも言い換えが可能である。

（14）ａ 君が家の花橘（君家乃花橘）はなりにけり花なる時にあはましものを

（萬葉集・巻八・一四九一）

ｂ わが屋外の花橘（和我夜度乃波奈多知婆奈）はいたづらに散りか過ぐらむ見る人なしに

（萬葉集・巻十五・三七七九）

要するに、「屋戸」「屋外」「屋」はすべて「家」と表わすことができる。これは今日でも自宅の「家屋」や「庭」を「家」と称するのと同じことである。「家」は、「屋戸」「屋外」「屋」を部分として含んだ日常的な生活の場を表わしているわけである。

これに対して、「家」が「忘る」「思ふ」等の目的語や、「恋し」の対象語として現れる場合がある。

（15）ａ 浮かべ流せれそを取ると騒ぐ御民も家忘れ（家忘）身もたな知らず

（萬葉集・巻一・五〇）

ｂ 高島の阿渡白波はさわけども我は家思ふ（吾家思）いほり悲しみ

（萬葉集・巻七・一二三八）

ｃ 暁の家恋しきに（伊敝胡悲之伎尓）浦廻より梶の音するは海人娘女かも

（萬葉集・巻十五・三六四一）

これらの「家」は、先に見た日常的な生活の場というよりは、日常の慣れ親しんだ生活そのものを表わしていよう。さらに（16）に示す「家」は、「恋ふ」「思ふ」等の主語として現れ、人格的な役割を担っており、家族を意味するものと考えられる。

（16）ａ 塩津山打ち越え行けば我が乗れる馬そつまづく家恋ふらしも（家戀良霜）

（萬葉集・巻三・三二六五）

ｂ 妹が門出入りの川の瀬を早み我が馬つまづく家思ふらしも（家思良下）

（萬葉集・巻七・一一九一）

ｃ 草枕旅の宿りに誰が夫か国忘れたる家待たまくに（家待真國）

（萬葉集・巻三・四二二八）

以上からすると、「家」には、次に示す三つの意味が認められることになる。

（17）ａ 日常的な生活の場

ｂ 日常的な生活

ｃ 家族

さて、「家」の意味を整理したところで、「旅」の意味について考えよう。先の伊藤博氏の言や、次に示す歌が示唆しているように、「旅」は「家」なしには成り立たない、それと対になる概念と考えてよい。

(18) 家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る
(家有者笥尓盛飯乎草枕旅尓之有者椎之葉尓盛)
(萬葉集・巻二・一四二)

このようであるならば、(17) に示す「家」の意味と対比させることによって「旅」の意味が明らかになるものと思われる。

(17 a) の「家」に対応する「旅」は次に示すものである。

(19) a 頼めりし人のことごと草枕旅なる間に(客有間尓)佐保川を朝川渡り
(萬葉集・巻三・四六〇)

b 間なく恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が(客有公之)夢にし見ゆる
(萬葉集・巻四・六二一)

c 鶴が音の聞こゆる田居にいほりして我旅なりと(吾客有跡)妹に告げこそ
(萬葉集・巻十・二二四九)

d 旅にあれど(多妣尓安礼杼)夜は火燈し居る我を闇にや妹が恋ひつつあるらむ
(萬葉集・巻十五・三六六九)

いずれも日常的な生活の場を裏返した、非日常の生活の場を表わすと言える。

(17 b) に対応する「旅」には次のものがある。

(20) a 草枕旅の悲しくあるなへに(客之悲有苗尓)妹を相見て後恋ひむかも
(萬葉集・巻十二・三一四一)

b 我が旅は久しくあらし(和我多妣波比左思久安良思)この我が着る妹が衣の垢付く見れば
(萬葉集・巻十五・三六六七)

c 草枕旅を苦しみ(多婢乎久流之美)恋ひ居れば可也の山辺にさ雄鹿鳴くも
(萬葉集・巻十五・三六七四)

d 旅と言へば言にそ易きすべもなく苦しき旅も(久流思伎多婢毛)言にまさめやも
(萬葉集・巻十五・三七六三)

これらは非日常的な生活を意味すると言えよう。なお (17 c) に対応する「旅」は存在しない。

以上述べてきたところをふまえれば、「旅」の意味は次のようになる。

(21) a 非日常的な生活の場

b 非日常の生活

上代語の「旅」の多義性は、生活の様態とその生活様態が行われる場所とが関わるメトニミーとして理解できる。なお、先に扱った「旅行く」の「旅」は (21 a) に含まれるが、非日常的な生活の場であると同時に、移動が可能となる広がりをもった空間として捉えられる。

五　動詞的な意味合いを含む「旅」

ひとくちに日本語といっても、そこには時間差や空間差を反映したさまざまなバリエーションが含まれる。「旅」という語に関しても、おそらく、それぞれの時代語や方言において意味や用法が異なるものと考えられる。本節では、現代語に認められる動詞的な意味合いを含む「旅」を明らかにし、古代語の「旅」はこれを欠いていることを示す。

ところで、広く名詞と考えられるものの中には、動詞連用形名

詞や動名詞のように、出来事や動作を表わし、場所よりも時間軸において認識される類がある。こうした名詞類は動詞性と名詞性を併せもっていると考えられるが、ここで注目したいのは、動名詞の動詞性である。

影山（一九九三）で述べられるように、動名詞の独自性は、主に語形成の観点と項の格標示の観点から指摘できる。例えば、(22) に示すように、「する」の前要素になるかどうかは動名詞であるかどうかを判定する上での重要な基準となる。

(22) a 散歩する、研究する、徹夜する
　b 立ち読みする、夜遊びする、買物する
　c テストする、プリントする
　d ＊医者する、＊うす味する、＊自動車する、＊ネクタイする

また、次に示すように、項の格標示において動名詞は動詞と同じように振る舞うことができる。ブラケット内部の格標示は、動名詞によって決定されていることがわかる。[4]

(23) a ［東南アジアや中国**を**移動］する
　b ［香港**に**移動］をする
　c ［東南アジアや中国**に**移動］の際は、…
　d ［好きなところ**へ**移動］ができる
　e ［箱根**を**移動］中に、…

(22)（23）で認められる現象は動名詞に含まれる動詞性の表われであるが、現代語の「旅」についても同様のことが認められ、現代語の「旅」も動名詞と言うことができる。

(24) 旅する
(25) a ［東南アジアや中国**を**旅］する
　b ［香港**に**旅］をする
　c ［東南アジアや中国**に**旅］の際は、…
　d ［好きなところ**へ**旅］ができる
　e ［北海道**を**旅］中[5]

では、「旅」が動名詞であるとしても、それはより具体的にどのような概念なのだろうか。

(26) a 日本海沿岸を　旅する
　b 青森に　旅する
　c ＊故郷から　旅する
　d ＊青森に　日本海沿岸を　旅する

(26) に基づけば、動名詞「旅」の項は次のようになる。

(27) a ―を　旅する
　〈経路〉
　b ～に　旅する
　〈着点〉
　c ＊…から　旅する
　〈起点〉
　d ＊～に　―を　旅する
　〈着点〉〈経路〉

(26 a) と (27 a) からわかるように、「旅する」は経路の「を」

を伴う。また、（26ｂ）と（27ｂ）から、着点の「に」を取ることがわかる。しかし故郷を離れるという意味で、（26ｃ）のように言えないことから、（27ｃ）に示す通り、起点の「から」を伴うことはできない。さらには、（26ｄ）と（27ｄ）に示すように、着点の「に」と経路の「を」を一度に取ることもできない。これは、「日本海沿岸を通って、青森に旅立った」という意味で、「青森に日本海沿岸を旅した」と言えないことによる。とすると、動名詞の「旅」は、経路と着点を項とするが、それらを一度に表現することはできないということになる。このように見てくると、動名詞としての「旅」はある種の移動動詞と同様の振る舞いをしていると言える。

影山・由本（一九九七）によれば、移動動詞は次のように分類される。

（28）ａ　経路指向の移動動詞

y MOVE［Path VIA z］（y がｚを通って移動する）

ｂ　起点指向の移動動詞

BECOME［y BE［Source NOT-AT-z］］（y がｚにいなくなる）

ｃ　着点指向の移動動詞

BECOME［y BE［Goal AT-z］］（y がｚに現れる）

（28ａ）の経路指向の移動動詞は、「さまよう、放浪する、歩く、走る、泳ぐ」といった形式が相当し、着点の「に」や起点の「から」を取らず、経路の「を」を取るものである。（28ｂ）の起点指向の移動動詞は、「出発する、出る、離れる、発車する、離陸する」といった形式が相当し、起点から動作主が存在しなくなったことを意味する。（28ｃ）の着点指向の移動動詞は、「入る、着く、到着する、上陸する、入社する」といった形式が相当し、着点に動作主が現れたことを意味する。

これらのうち、先述したように、「旅する」は起点の「から」を取らないから、起点指向の移動動詞とは言えない。これに対し、「旅する」は経路の「を」を取るから、経路指向の移動動詞と言うことができ、また、着点の「に」を取ることから、着点指向の移動動詞とも言うこともできる。

（29ａ）には、「どんどん」という副詞と経路指向の移動動詞との修飾関係を示しているが、この場合「どんどん」は経路上の移動の進展を表わしている。

（29）ａ　どんどん　歩いた／走った／さまよった［経路上の移動の進展］

ｂ　どんどん　脱出した／出発した／到着した／入った［完了した移動の回数］

ｃ　どんどん　旅した［両義的］

（29ｂ）は、同じく「どんどん」と着点指向の移動動詞ないし起点指向の移動動詞との修飾関係であるが、ここでは、完了した移動の回数が表わされている。そして、（29ｃ）の「どんどん旅した」では、経路上の移動の進展を表わす解釈と、完了した移動の回数を表わす解釈の両方があり得る。このことは、「旅する」が

経路指向の移動動詞でもあり、着点指向の移動動詞でもあることから生じていると考えられる。以上から、動名詞としての「旅」は、広義の移動様態を表わし、経路指向の移動動詞の側面と着点指向の移動動詞の側面とを併せ持つと言えよう。ただしこれらを別語として扱うかどうかは悩ましいところである。

「旅する」が着点指向の移動動詞であることは、(30) に示す現象からもうかがうことができる。

(30) 「—先」

a 旅先

b 引っ越し先、留学先、移動先、移籍先、渡航先、配達先、出張先、保管先、入院先、搬送先、遊説先、到着先、滞在先、訪問先、勤務先、帰宅先、赴任先、左遷先、就職先、連絡先

c バイト先、行き先、出先、軒先、指先、入手先

d *散歩先、*検討先、*変更先、*決定先、*購入先

(30a) のように「旅先」という言い方があるのはいうまでもないが、他に (30b) のような生産性のあるタイプと、(30c) のような語彙的に生じたタイプのあることが観察できる。(30b) は「先」の前要素が動名詞となる場合であるが、単に動名詞という範疇を選択するだけでなく、意味的な焦点が着点にある動名詞、統語的には着点の「に」ないし「へ」を取る動名詞を選択する。(30d) に示すように、この条件に合わない動名詞は適格と言えない。おそらく「旅先」は (30b) と同類であると考えられ、これは「旅する」が着点指向の移動動詞であることの現われであるように思う。

第三節、第四節で見たように、古代語の「旅」では動詞的な意味合いが見受けられない。動名詞として移動様態を表わす「旅」は派生的なもので、近代になってはじめて生じたものと思われるが、「旅」の語史においてこうした変化は最も大きなものと考えられよう (小林・梅林 (二〇〇五) も参照)。動詞的な意味合いを含まない現代語の「旅」については、古代語に準じるものと考えるが、詳しくは機会をあらためたい。

六 おわりに

現代において「旅」は、移動と非日常性とが混在した概念と言えようか。しかし、古代語では、現代語とは異なり、「旅する」のように用いられることがなく、また他の動名詞的な用い方をされることがない。あくまでも生活の様態とそれが行われる場所を表わしている。この点からすると、「旅」という語が生じるそもそもの契機は、住み慣れた日常的な生活ないしその場所と、不慣れな非日常的な生活ないしその場所とを区別するという認識の仕方に求められるように思う。今日でも、化石的に「旅に死す」ということがあるが、この場合の「旅」は動名詞としての「旅」と意味が異なるのである。

注

（1）本稿では、漢語の「旅」ではなく、和語としてのタビを考察の対象とする。本来なら「旅」ではなく、「タビ」ないし「たび」と表記するべきであるが、便宜上「旅」と記して和語としてのタビを表わすこととしたい。

（2）「旅」の語源については数多くの説が存する中で、柳田説はきわめて有力である。他に、この説を継承し発展させたものとして、木下（一九七二）がある。

（3）「家」については、後藤（一九六七）、真鍋（一九七〇）、吉井（一九八〇）等の論考をも参照。

（4）この点について、詳しくは影山（一九九三）によられたい。

（5）熟さない言い方ではあるが、ネット上でしばしば見える。

使用文献

萬葉集…『萬葉集 本文篇』『萬葉集 訳文篇』塙書房、続日本紀宣命…『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館

参考文献

伊藤　博（一九七六）『萬葉集の表現と方法 下 古代和歌史6』塙書房

影山太郎（一九九三）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎・由本陽子（一九九七）『語形成と概念構造』研究社出版

木下正俊（一九七二）『万葉集語法の研究』塙書房

工藤力男（一九八二）「旅という言葉」『岐阜大学 国語国文』一五号、四〇—四八頁、岐阜大学国語国文学会

後藤和彦（一九六七）「いへとやど」『薩摩路』一一号、一〇—一八頁、鹿児島大学文理学部国文研究室

小林賢次・梅林博人（二〇〇五）「芭蕉の「旅」は現代の「旅」と同じか」『日本語史探求法』朝倉書店

阪下圭八（一九八二）「〈旅〉という言葉」『月刊百科』二三一号、七—一二頁、平凡社

柳田国男（一九八一）「トビの餅・トビの米」『定本 柳田国男集』一四巻、筑摩書房

柳田国男（一九八二a）「行商と農村」『定本 柳田国男集』一六巻、筑摩書房

柳田国男（一九八二b）「旅行の進歩と退歩」『定本 柳田国男集』二五巻、筑摩書房

真鍋次郎（一九七〇）「家もあらなくに」『萬葉』七四号、六二—六七頁

吉井　巌（一九八〇）「いへ・やど・やね」『萬葉』一〇四号、四八—五三頁

本稿は、第九二回国語語彙史研究会（二〇〇九年九月一九日、神戸親和女子大学）での口頭発表に基づく。発表に際し、多くの方々からご教示を賜わった。記して厚く御礼申し上げます。なお、この研究は平成二一年度科学研究費補助金（若手研究（B）、課題番号 二〇七二〇一一九）の研究助成を受けたものである。

（たけうち・しろう　群馬大学准教授）